

# 『認知症の理解から 認知症を持つ人の理解へ』

認知症学術講演会  
平成28年3月17日(木) 18:30～

宮崎直人

主催 エーザイ株式会社

## 今日のメニュー

1. 繋がるということ
2. 「認知症」の理解から  
「認知症」を持つ人の理解とは
3. まとめ

## 今日のメニュー

1. 繋がるということ

2. 「認知症」の理解から

「認知症」を持つ人の理解とは

3. まとめ

## 自己紹介

両隣の方と簡単に自己紹介し合ってください

## 人は人やものとの関係の中で 自己の在り方を認識している

- 強制的に知らない場所や更にまったく知らない人達の中で、これから過ごさなければならないとした時、お互いに少しでも知ることができたら、ちょっと安心します。
- お互いに少し気持ちが楽になれるはずです。
- 関係の構築は、そこからスタートだと思うな。

5

## 自分自身との繋がりの中で 最近感じていること

50歳を過ぎた頃から・・・

皆さんは、数日間の間と同じ雑誌を  
買っちゃったことありませんか？

## その他、最近感じていること

- 自分の唾液で誤嚥する「へんなところはいった」
  - 口から出て来る言葉と言いたい言葉が違う
  - 「車のウォッシャー液をウォシュレットと言う」
  - 『ん～ん～』と知らないうちに言っている
  - 予定を忘れている
  - 人の名前が覚えられない
  - 朝起きたら足腰の節々が痛い
  - 筋肉痛が遅れる
  - 涙もろくなった
- などなど

自分以外の人やものとの繋がりの中で  
ずっと気になっていること

皆さんは何と繋がっていますか？  
何と繋がっていると安心ですか？

なぜ、さわり・ふれるのか ～仮説～

- 失われていく世界とのつながり
- 失われていく自己
- 自分を探す旅
- 誰かと何かと繋がりたい 繋がっていたい
- 繋がっている事での安心するのではないか

## 時間や空間や出来事を飛び交う主観的経験

- ~誰にでも起こりうること・起っていること~
- 『認知症の状態にある人は、時間や空間や出来事のズレや穴を懸命に埋めようとしている』
- 僕たちの仕事は、そこで起きる気持、感情、想いを慮ることから始まる
- そうして人や物との関係はできていく

## 人は常に何かと繋がっている

そのことで様々な関係と  
自分とのバランスを保っている  
(人 物 地域 感じる全てetc)

どう繋がっていたか？  
どう繋がっているか？  
どう繋がりたいか？

人やものとの繋がり、もっとも大切なこと

今日のメニュー

1. 繋がるということ

2. 「認知症」の理解から

「認知症」を持つ人の理解とは

3. まとめ

## 認知症とは(介護保険法上の定義)

(認知症に関する調査研究の推進等)

第五条の二 国及び地方公共団体は、被保険者に対して認知症(脳血管疾患、アルツハイマー病その他の要因に基づく脳の器質的な変化により日常生活に支障が生じる程度にまで記憶機能及びその他の認知機能が低下した状態をいう。以下同じ。)に係る適切な保健医療サービス及び福祉サービスを提供するため、認知症の予防、診断及び治療並びに認知症である者の心身の特性に応じた介護方法に関する調査研究の推進並びにその成果の活用に努めるとともに、認知症である者の支援に係る人材の確保及び資質の向上を図るために必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

その1

### 脳血管疾患、アルツハイマー 病その他の要因に基づく

原因となる疾患

約70～100



その2

**脳の器質的な変化により**  
脳という器が壊れてゆく

その3

**記憶機能及びその他の  
認知機能が低下した状態**  
知的な能力が変化してゆく

## 認知機能とは

### 記憶の機能

- ・思い出す、覚える機能

### 見当識の機能

- ・時間や場所の見当をつける機能
- ・物の名前を見当をつける機能

### 実行機能(行為／認識／言語など)

- ・生活するための行為  
(着替え・買い物・掃除・料理・トイレの始末等)
- ・言葉で伝えること
- ・字が書くこと
- ・判断をすること
- ・計算をすること
- ・同時に複数の事を行うこと 等々

#### その4

## 日常生活に支障が生じる 程度にまで

これまでできていたことが  
できたりできなかったりと  
困難と思える状態へと向かう

## 例えば『お茶を飲む』

皆さんで考えてみてください！

### ～「お茶を飲むまで」の思考と認識と行為と感情の関係～

お茶が飲みたいと思う

正座の状態からテーブルに両手をつく

左足は立てひざを保つ

右の足の裏を床につける

テーブルに置いた両手に体重をかける(この時点で、よっこいしょ！と出る)

左の足の裏を床につける

前傾姿勢を両手で支える

腰を伸ばしながら立ち上がる

台所へ向きを変える

台所へ歩く

お湯を沸かそうと思う

やかんを手にする

やかんのふたをとる

やかんの水を入れる口を水道の蛇口に合わせる

左手にやかんを持ち

右手で蛇口をひねる

水の量を確認しながら適量を入れる

やかんのふたを閉める

## ～「お茶を飲むまで」の思考と認識と行為と感情の関係～

やかんをコンロに置く  
 コンロのダイヤルを回す  
 火力を調節する  
 やかんの様子を気にかける  
 お茶葉のある場所の見当をつける  
 左手で食器棚の扉を開ける  
 お茶葉の入った筒を探す  
 右手で食器棚からお茶葉が入った筒を取り出し置く  
 食器棚から急須を取り出し置く  
 食器棚から湯飲み茶碗を取り出し置く  
 食器棚の扉を閉める

お茶葉の入った筒のふたを開ける  
 筒のふたを左手に持つ  
 右手で筒を持ち  
 筒のふたに適量のお茶葉を入れる  
 急須のふたをとり  
 急須にお茶葉を入れる  
 お湯が沸いたか気にかける  
 お湯の沸き具合を音でも確認する  
 お湯が沸いたかどうか湯気の出具合で確認する  
 お湯が沸いたことを認識する  
 コンロのダイヤルを回し火と止める

## ～「お茶を飲むまで」の思考と認識と行為と感情の関係～

やかんを持ち上げ  
 沸いたお湯を適量急須に注ぎこむ  
 急須のふたを閉める  
 湯飲み茶碗にお湯を適量入れる(湯のみ茶碗を温めるため)  
 やかんをコンロの上に戻す  
 湯飲み茶碗のお湯を捨てる  
 湯飲み茶碗に急須に入っているお茶を注ぎこむ  
 湯飲み茶碗を持つ

居間へ歩く(慎重に歩く)  
 居間のテーブルにお茶の入った湯のみ茶碗を置く  
 両手をテーブルにつき座る(よっこらしょ!と口から出る)  
 楽な体勢になる  
 右手に湯飲み茶碗を持つ  
 左手で底を支える持つ  
 両手で丁寧を持ちゆっくりと火傷しないよう口元に近づける  
 熱さを確認しながら口に注ぎ込み飲む

## 『私たちの中で起こっている認知機能の理解』

～思考や認識や行為や感情の関係によって繋がれて達成される～

- 私達は、普段の生活において、このように細かい思考や認識や行為や感情の関係の連続であることまで考えたり、意識してお茶を淹れない。
- だから、いざ分析してみると多くの人は大雑把に分類することになる。
- しかし、ここで思い出したことは、「お茶を飲むまで」と言う行為は、このように様々な思考や認識や行為や感情の関係の集まりということである。
- その一つひとつが繋がりがあって一連の生活動作として、若しくは生命活動として自然にやってのけているのである。

## 『私たちの中で起こっている認知機能の理解』

～思考や認識や行為や感情の関係の繋がりによって達成される～

- 一つの思考や認識や行為や感情を「点」と考えるのであれば、その「点」の一つひとつが出来るのと同時に、繋がってはじめて線となり、一つの目的を達成することで、面となり、生活に広がり潤いをもたせている。
- しかし、この「点」のどこかが、自然の変化である老化或いは、ある種の疾病や障害又は不自由であったり、更に「点」を阻害するような他の力が加わったとしたら果たしてどうなるであろうか。
- 間違いなく目的は達成されず、お茶を飲むことはできないであろう。目的が達成されるどころか、途中で戸惑い、混乱し、不安になるであろう。自分を責める人もあれば、他のせいにする人もいるであろう。
- そのことを私達専門職はずで知っているはず。

『私たちの中で起こっている認知機能の理解』  
知る⇒経験する⇒感じる⇒気づく の繰り返し

- 認知機能の変化によって、生活に不自由を感じる。脳梗塞と同じで、小さな梗塞による様々な目に見えない、感じない出来事は、別な機能や能力が補おうとする。
- 記憶、見当、実行機能の不自由がその中枢にあるとすれば、「お茶を飲むまで」の一連の思考や認識や行為や感情の関係に不適應な状態をきたす事は言うまでもないであろう。

『私たちの中で起こっている認知機能の理解』  
知る⇒経験する⇒感じる⇒気づく の繰り返し

- 様々な不自由に照らし合わせれば、それぞれに違う支援がいる。彼らの不適應を知るということは、この一連の思考や認識や行為や感情の関係を分析できる力とそこから彼らの不適應に対する支援を届ける力を持つことである。
- 専門職の専門性とは、「ひとの生活の営みの中で起こる変化」を知り、経験し、感じ、気づくことであり、健全な生命活動の支援につなげてゆくこと。
- 確かに「認知症の理解」も大切だが、その前に「ひとの営みの理解」が先だろうと思う。

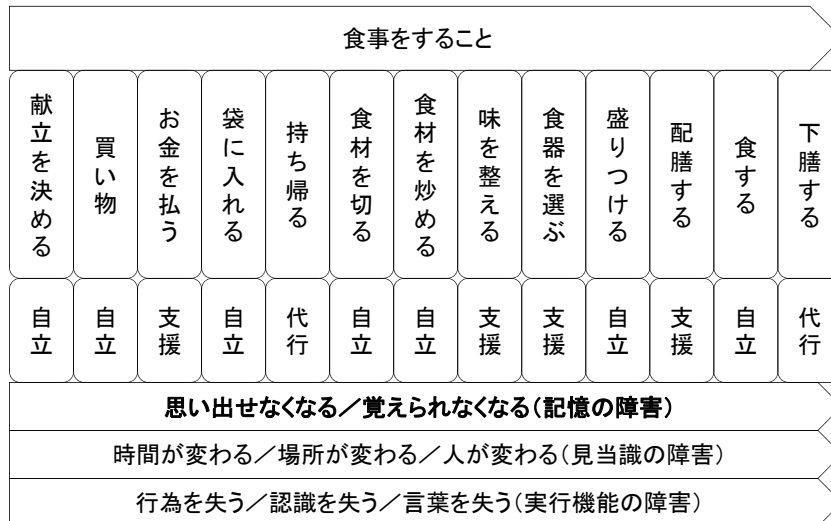
生活の支援のポイント 『生活の点の見極めから線へ繋げる(生活の再構築)』  
認知症の状態にある人の生活行為の困りごとと支援の理解シート

洗顔と歯磨き												
道具を用意する	洗面所へ行く	顔を濡らす	石鹸をつける	洗い流す	タオルで拭く	キャップを開ける	歯磨き粉をつける	キャップを閉める	歯を磨く	口をゆすぐ	口周りを拭く	道具を片付ける
支援	自立	自立	自立	自立	自立	支援	自立	支援	自立	自立	自立	支援
思い出せなくなる／覚えられなくなる(記憶の障害)												
時間が変わる／場所が変わる／人が変わる(見当識の障害)												
行為を失う／認識を失う／言葉を失う(実行機能の障害)												

生活の支援のポイント 『生活の点の見極めから線へ繋げる(生活の再構築)』  
認知症の状態にある人の生活行為の困りごとと支援の理解シート

入浴												
浴室の準備	着替えの準備	お風呂場へ行く	服を脱ぐ	湯加減をみる	お湯をかける	髪を洗う	体を洗う	湯船に入る	湯船から出る	体を拭く	服を着る	道具を片付ける
代行	支援	自立	自立	代行	支援	支援	自立	支援	支援	自立	自立	代行
思い出せなくなる／覚えられなくなる(記憶の障害)												
時間が変わる／場所が変わる／人が変わる(見当識の障害)												
行為を失う／認識を失う／言葉を失う(実行機能の障害)												

生活の支援のポイント 『生活の点の見極めから線へ繋げる(生活の再構築)』  
認知症の状態にある人の生活行為の困りごとと支援の仕組み



## 認知症の本質

# 認知症は

複合した認知機能障害の総称。



## 支援の3つのステージ

1) その認知機能の変化に伴い、うまく生活と折り合いが持てなくなってゆくことにより、起こりうるありとあらゆるズレ(不適応な状態)を、生活をベースに予測し適切に支援するなど、応じてゆくこと。

2) その認知機能の変化に伴い、その進行により起こる不適応な状態に対して、ノンバーバル(準言語・非言語的)なかかわり方を必要とする支援の実践を充実させてゆくこと。

3) 身体的な機能の変化、疾患的な症状の進行に伴う終末期における緩和的な支援の実践を充実させてゆくこと。



認知機能の変化に伴う、総合的な支援が継続的に展開できること

生活の営みの中にある  
認知機能への支援を充実させる

～認知機能(生活するための機能)への支援～

『人』と『認知症』を理解し  
その上で  
生活する事に対する  
備えとお膳立て(準備)を怠らないこと

認知症ケアの本質

認知症ケアとは  
認知機能が変化しても  
不適応な状態を発症させない支援

## 今日のメニュー

1. 繋がるということ

2. 「認知症」の理解から

「認知症」を持つ人の理解とは

3. **まとめ**

## 認知機能の変化に伴う総合的な 支援が継続的に展開できるか

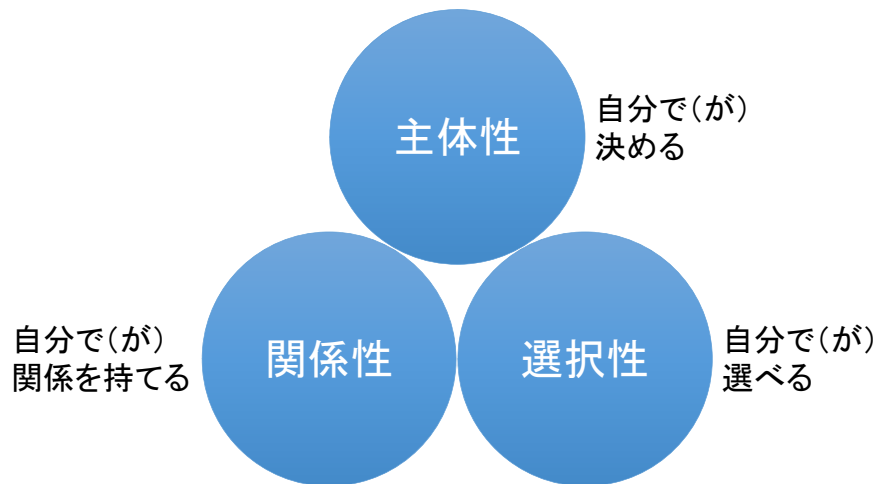
社会というチームで

国というチームで

世界というチームで

地球というチームで

## 『人』がよりよく生きるために守られるべき3つの原則



## 『爪切り』

昨年の11月、グループホームで穏やかに生活していた91歳の母が2度目の脳梗塞を発症し、総合病院に緊急搬送された。

その後、私は往復2時間以上もかけて、母の見舞いを続けた。行く度に寝たきりに近づいていく母を見るのは、とても悲しく切なかった。

急性期も過ぎ、私自身の体力も考えて、通勤途中に寄れる近くの病院に転院できるようお願いした。

気になっていることがあった。タカの爪ののように伸びた母の足の爪だ。新しい年が明けて早々、母は転院となった。爪はそのままに。転院して3日目、母の爪はきれいに切りそろえられていた。私はとてもうれしかった。

家族の思いとは、そういうことであり、人間の尊厳とは、そういうことであり。病院の質とは、そういうところにあると思えてならなかった。

私には、爪切りという小さな行為の中に、決して大げさではなく、全てが含まれているように感じられた。

終末が近ければ近いほど、大事なことは、高度な医療や技術ではなく、一人の人間として、どう向き合ってもらえるのかということではないだろうか。

近いということで希望した病院だったけれど、自分の選択にまちがいはなかったと満足している。

寝たきりの 母の爪切り 人として  
ここに居ると 生きているよと

豊浦町 主婦

「目を開けて  
もっと私を見て！」

イギリス ヨークシャー  
アシュルディー病院の  
老人病棟の奇跡

ひとは  
どのような状態であっても  
感情・感性は最期まで  
そこに「在る」ものです

悲しみ・怒り・羨望・不安・愛

皆さんお疲れ様でした。  
ありがとうございました。